

公益財団法人国土地理協会 第17回学術研究助成
(地図・地名に関する学術的調査・研究)

**ニカラグア・モスキート平野における
ウルワの湿地生態史と地名の関わり**

研究代表者 池口 明子 横浜国立大学教育学部

1. はじめに

西カリブ海沿岸地域は雨季と乾季の差が明瞭で、季節的に広範囲に湿地が形成される。熱帯湿地への人類の適応を知る上で重要な地域であるが、これまで湿地環境の利用という点から生活技術を明らかにした研究は非常に少ない。その理由の一つは、16世紀のスペイン・イギリス進出以降、先住民の生活が変化を余儀なくされ、歴史的に形成されてきた生業技術を知ることが困難だと考えられてきたことにある。例えばニカラグアの官製地図にはスペイン語・英語地名のみが印字され、環境利用を示唆する地名はみられない。しかし、筆者の事前調査では野鳥や爬虫類、魚類の利用を示す先住民言語の地名のほか、他民族との接触の歴史を示す多言語の地名が残っていることが確認されている。そこで本研究は、中米最大の沖積低地であるモスキート平野の先住民ウルワの生活空間を対象として地名を収集し、過去の湿地利用を示す生態史地図と重ね合わせることで湿地への適応の一側面を明らかにすることを目的とする。

ウルワは植民地時代以前、モスキート平野に広く居住した言語集団であるが、スペイン、イギリスとの接触、海洋民ミスキートやクレオールの内陸進出、アメリカ資本の進出やコントラ戦争を経験する過程で母語話者が地域のマイノリティになってきた。このなかにあつてウルワ語地名の収集は急務であるといえる。さらに、現存しているウルワ語話者にはアメリカ資本進出以前から湿地を広い範囲で利用してきた人々がいる。これらの対象者から過去50年間の環境利用を聞き取り、地名の解釈をおこなうことで、動態的な地図を示し、同様な植民地支配を経験しているカリブ海地域の先住民地図のモデルを提示したい。

以下、2章ではラテンアメリカの先住民地図に関する既往研究を概観し、その課題と本研究の方法を述べる。続いて3章で、モスキート平野の湿地環境、先住民の居住状況、および生業の概要を述べる。4章では地名とそれにかかわる語りを調査結果に基づいて述べ、終章でまとめと今後の課題を述べる。

2. ラテンアメリカの先住民地図

(1) 従来研究

先住民マッピングは1960年代からカナダやアラスカではじまり、1990年代以降に第三世界に広まった。1990年代以降とりわけ第三世界では、参加型開発手法と融合し、参加型先住民マッピングや、GPS、GISを用いた先住民のPGISとして普及するようになった。そもそも北米では米国人類学者による先住民研究が古くから行なわれ、手描き地図を用いた集落立地や生業パターンの記述がなされてきた(Boas 1964; Kroeber 1939; Steward 1955)。これらの研究において地図は、民族誌を作成する手段の一つであったが、この地域における生業地図の方法論的なルーツといえる。1967年にニスガ先住民協会(Nisga'a Nation Tribal Council)が、先住民の土地権利は法的に消滅したことはない、としてブリティッシュコロンビア州を提訴した。1973年にカナダ最高裁は先住民の土地への権利を認め、これを受けてカナダ政府は先住民との交渉のためのマッピング調査事業に補助金を出した。この調査は1976年に3巻からなるイヌイットの土地利用と居住に関する事業報告書(Inuit land use and occupancy project report)を発行し、同様の手法で他のイヌイットグループについても土地利用のマッピングが行なわれた(Wood 2010: 129-142)。そこでとられた手法の1つが、生活史地図(Map biography)である(Freeman 2011)。これは狩猟・採集・漁業などの生業活動を、個人を対象に時間を遡って空間的に表現しようとするものであり、たとえば野苺の採集やカリブーの狩猟活動が行なわれた場所、その地名や用いられた生業技術や野営地を各自について記録し、地図を作成する。狩猟・

採集・漁場のマッピングは、19世紀の白人入植者が農業を営まないイヌイットを「土地をもたない人々」としてきたことへの反発に動機づけられた空間表象であった（Chapin et al 2005: 623）。これらの活動では、先住民が居住し生業を営む土地や資源の権利を主張することが主な目的となっている。権利主張の相手は連邦政府や行政で、交渉の場には法廷も含まれ、準拠する国際法や国内法、その判例は西欧の法的基準であることから、緯度・経度を持った地理情報が正当な根拠として用いられる。GPSによる位置情報の作成や官製地図との照合は、こうした目的に動機付けられ活用されてきた。カナダの先住民マッピングは、土地権利の主張という政治的目的を持った自発的な「運動」の一環であり、地理情報管理が長期に渡って先住民の NGO によって維持されている稀なケースである。その背景には、インターネットやコンピューターの普及、天然資源に由来する先住民集団の資金の豊富さがある（Chapin et al. 2005:629）。

ラテンアメリカにおける先住民権利のためのマッピングは 1990 年代から数多く行なわれるようになった。その背景の一つは国際法環境の変化である（Stocks 2005）。ILO が協定 107、勧告 104 を 1957 年に採択し、先住民の人権保護を促進した。1989 年にこれが協定 169 に更新され、ボリビア、コロンビア、コスタリカ、グアテマラ、ホンジュラス、メキシコ、パラグアイ、ペルーで批准された。国際アメリカ人権裁判所（Inter American Court of Human Rights）のような国際機関や、世界銀行などの開発ドナー、WWF などの国際 NGO が先住民権利のための参加型マッピングを支援するようになったことも増加の背景にある。

これまでニカラグアやホンジュラス（Bryan 2011）、ベリーズ（Toledo Maya Cultural Council and Toledo Alcaldes Association 1997）、パナマ（Herlihy et al. 2003; Herlihy 2003）、ベネズエラ（Sletto 2014, 2015）、ボリビア（Cronkleton et al. 2010）、チリ（Hirt 2012）などで実践報告や、技術と制度の批判的な検討がなされている。ここでは、2つの先住民自治州を持ち、90年代初期から先住民マッピングが行われてきたニカラグアにおける実践例について述べる。ニカラグアはアフリカ系を含む多様なエスニック集団に土地への権利を認めている点でラテンアメリカにおけるモデルとされる（Van Cott 2000）。コントラ戦争が終結した後、1987年にニカラグア政府は、東海岸における先住民およびアフリカ系住民（クレオール）の自治を、大西洋岸地域自治法（Estatuto de autonomia de las dos regiones de la Costa Atlántica de Nicaragua）で法的に保証した。しかし、戦争終結によって軍・警察が東海岸から撤退した直後の沿岸地域には、数多くの企業や植民者が進出し、杜撰な手続きによって森林や鉱産資源、漁業資源の開発がなされるようになった。先住民マヤンナ（Mayangna）の村落であるアワスティンニ（Awás Tingni）のマッピングは、法律家と人類学者が加わった土地権利擁護のための参加型マッピングである（Anaya and MacDonald 1995; Wainwright and Bryan 2009）。この運動は、ニカラグア環境自然資源省（MARENA: Ministerio del Ambiente y los Recursos Naturales de Nicaragua）がニカラグアとドミニカ共和国が共同出資する企業に 43,000ha の森林伐採権を認めたことに始まる。これに対抗して、WWF とアイオワ大学により、プロジェクト組織が形成された。自治法では、先住民の領土権を、土地利用の慣習的パターンに従って認めることになっている。居住の権利に加えて、最低でもその領域から自然資源を利用し利益を得ることが認められ、それらの資源の商業的開発計画に参加する権利がある。法律家は政府にこの権利保護義務を怠ることが法に反することを認めさせた。人類学者は、法的根拠となる慣習的利用の地点と範囲を GPS 操作を学んだ村落住民とともに記録した。具体的には過去と現在の畑のサイズや位置、世帯と村の位置、「文化的に変容した景観」（例えば見分けられる木、植物、狩猟道など、村人が作ったもの）、信仰に重要な土地、神聖な場所、自然資源など信仰システムを構成する重要な要素などである。これらの結果、森林伐採権の認可は中止され、43,000ha は特定の環境保全策、年間計画のもとで、村落住民も利用者としてすす

められることになった。

同時期に、ニカラグア北大西洋自治州（RAAN：Region de Autonomia Atlántico Norte）沿岸海域で行なわれた先住民マッピングは、海域を対象とした先進的な事例である（Nietschmann 1995, 1997）。先に述べた自治法には、海域への権利は記載されず、沿岸ではホンジュラス企業によるロブスター漁が活発におこなわれていた。これに反抗した先住民ミスキート（Miskito）は、1990年に自民族のコミュニティによる海洋保護区の設置を提案した。チャモロ政権による認可、および調査準備期間の提示を受けて、米国地理学者ニーチマンがマッピング事業を提案する。この提案に対して13の村落が参加し、ミスキート・サンゴ礁マッピング事業が1994年に始まった。これは5,000km²に渡る広大な海域について、サンゴ礁や海草場などの海底環境、それらに対するミスキートの地名を地図上に示すものである。各村落から潜水漁業者や船長が数名選出され、地理学者がGPS、および水中カメラによって海底地形を記録してベスマップを作成したのち、住民のワークショップで挙げられた地名が付けられ、ウミガメなど主要な資源生物の漁場も記載された。ここで付けられた地名には、その漁場を利用していた利用者の名前が付されたものが多く含まれる。さらに海洋生態系モニタリングのために方形枠が設定され、その交点で生物種が記録された。

1997年にはニカラグアの二つの自治州の陸域全体をカバーする大規模な参加型マッピング事業が開始された（Dana 1998; Gordon and Hale 2003; Offen 2003）。これは農業近代化をすすめるニカラグア農業改革機構（INRA：Instituto Nicaragüense de Reforma Agraria）とテキサス大学の中央アメリカ・カリブ海研究協会（CACRC：Central American and Caribbean Research Council）が世界銀行の助成を受けて始めたものである。CACRCは大西洋自治州研究所（CIDCA:Centro de Investigación y Documentación de la Costa Atlántica）と共同研究体制を作り、プロジェクトは自治州の127の村落を対象におこなわれ、各村落が主張する領域のマッピングを当初の目的としていた。CACRCは地域住民から15人の野外調査員を雇用し、GPSの概要と使用方法の研修を2週間おこない、その間にワークショップを開いて境界線の作り方や意味について話し合いを持った。研修の後、地理学者とGPSを持った野外調査者が村落を訪ね、村落の代表者とともに村落境界についてランドマークとなる木や景観など、自然・人工物のポイントや、現在と過去の土地利用の状況などを調査した。土地利用の分類には鉱産資源、農地、漁場、狩猟場、家畜飼育、信仰、交通などが使われた。同じ地点について、民族により異なる地名がある場合もあり、こうしたケースでは協議して合意した地名が付けられた。調査の結果得られたポイントの間を線でつないで村落境界とする場合には、村落間の対立を避けるため、実線を使わずに100m幅の点線を用いた。こうして作成された地図は、再度コミュニティに公開し、意見をもらった後、GPS点、境界、土地利用シンボルを入れたレイヤーを1980年代の5万分の1縮尺の地形図に重ね合わせて最終版が作成された。

こうして作成された地図情報は誰がどのように管理し、利用されているのだろうか。筆者は2014年10月、および2015年7月にそれぞれ北部自治州、南部自治州において、ミスキートの海洋マッピング事業、およびCACRC/CIDCAのマッピング事業について、参加者やニカラグア漁業養殖機構（INPESCA:Instituto Nicaragüense de Pesca y Acuicultura）、MARENA等の関連団体に、作成された地図情報の管理・利用状況について聞き取り調査をおこなった。北部自治州のミスキートの海洋地図は、参加したミスキート村落住民や、地域の大学研究者が紙やデジタル媒体で保有していた。しかし当初ニーチマンらが意図した地図に基づく海洋保護区の生態モニタリングは実現しておらず、海洋・漁業関連行政もこの地図を保有していなかった。参加した漁業者の1人によれば、重要な生物資源の生息地情報の地図は、参加者以外の村人や、外国人も欲しがっていたが、地図を見せると資源を捕られる可能性があるので公開できなかつた、とのことであつた。またCACRCのカウンターパート

である CIDCA では、2007 年の政権交代後に多くの資料が首都マナグアに移動し、当時の地図や資料は残されていないという（CIDCA 所長 Byres 氏の私信による）。

ニカラグアの事例に限らず、開発援助事業によるマッピングは持続性がないケースが多い（Dunn 2007, Crampton 2009）。そもそも事業対象となる地域は多くの場合農村であり、コンピューターや安定的な電気供給もないことが一般的である。事業は専門家が計画し、契約期間が終わって専門家が去れば地理情報も消えてしまう、というのが現状である。

（２）研究方法

本研究では、ニカラグア・南カリブ海沿岸自治州、リオ・グランデ・マタガルパ川（以下リオ・グランデと省略）下流域におけるウルワ系住民が使用する地名を収集し、地図上に記録し、湿地生態史とのかかわりを考察する。ウルワはかつてモスキート平野を流れる流域沿いに広く分布した先住民グループ「スム」の下位グループで、焼き畑や狩猟、漁撈を主な生業としてきた。ウルワに関するまとまった民族誌は少なく、Conzemius(1932)や Helms (1969) がミスキートとの関係でウルワを含むスム系住民について記述しているのみである。それらには、イギリスの保護領となったカリブ海沿岸では、沿岸のミスキートが主としてイギリスとの交渉をおこない、林産物交易、奴隷交易を介してスムに対して優勢な権力を持つようになった経緯が描かれている。しかしスムもミスキート同様、流域を広範囲に移動し、交易や内戦を経て近隣諸集団との混血がすすんだ。メスティソの入植がすすむ現在、先住民の生活領域を主張する必要性は増しており、ウルワ語やウルワ集団のアイデンティティを示す地名や知識を地図化することは重要であるが、多様な出自が共同で生活している実態を踏まえ、ウルワ語に限らず生活に密着した地名を収集することが必要となっている。また、先住民集団が一様でないことを踏まえると、地名収集はインフォーマント個人の経験や、収集プロセスの偶発性のなかで収集された部分的な知識であることを常に記述する必要がある。

地名収集のための調査は、モスキート平野の生業活動が最も活発になる乾季の 3 月 7 日から 15 日におこなった。まず、ウルワ語保護運動をしている住民団体の主催でワークショップを開催し、関心ある村人に集ってもらい、同行者としてだれがふさわしいかを話し合った。さらに、名称がある場所だけではなく、名称はない、あるいは忘れていても、生業やウルワの歴史にとって大事なランドマークを記録する必要性などを話し合った。当日は船外機付きのボートを借りて、ミスキートの領域との境界を流れるリオ・グランデの支流と、リオ・グランデの下流域を遡上しながら地名収集と聞き取りをおこなった。

3. モスキート平野の湿地環境と生業活動

（１）湿地環境と集落

モスキート平野は北緯 10～15° の範囲にカリブ海に面して広がる中米最大の沖積平野である。貿易風の強い影響を受け、6 月から 11 月までは雨季、12 月から 5 月までは明瞭な乾季がある。年間降水量は最大 5,000mm に達し、雨季には流域に広大な湿地が形成される。沿岸には潟湖が形成され、マングローブやヤシ科植物が分布する。その陸側の平野には、この平野が南限とされるカリビアンパインの松林のサバンナが広がる。さらに海岸から離れると、常緑熱帯雨林とヤシ林、松林が混交する景観が表れる。本研究の対象としたリオ・グランデ川はモスキート平野の中心部に位置し、太平洋側のマタガルパ山脈からカリブ海に向かって約 430km を流れる平野の主要河川である。河口には潟湖があり、河口から約 80km の下流域には広く氾濫原が形成されている。

モスキート平野のコロンブス以前の言語グループはラマ、ミスキート、スムがあり、前者はオリノ

コ川起源のチブチャン語系，後二者はマタガルパ語系に属する．マタガルパ語系の起源は北方・南方双方が主張されている（Green 1999）．ラマはブルーフィールズ南にあるラマキーに 200 人ほどが集住している．ミスキートは先住民のなかでも最大のグループで海岸部を中心に分布し，とくに北部自治州に人口が集中している．スムには下位グループとしてトワッカ，ウルワ，パナマッカ，バウィツカ，ククラがいる．トワッカは北部自治州のパトゥッカ，ワワなどの流域，パナマッカはリオココ，リオプリンサポルカの流域，ウルワはリオ・グランデの流域に集落を形成している．17 世紀以降に移住してきたグループにはガリフナ，クレオール，メスティソがあり，中国系やシリア系の商人も町に居住する．ガリフナはイギリスが 1796 年に小アンティール諸島のセントヴィンセントからホンジュラスのロアタン島に追放したカリブ系グループを起源とする移民である．パールラグーン沿岸に三つの集落があり，漁業・農業を営むほかエコツーリズムも始まっている．クレオールは 18 世紀にジャマイカから奴隷として連れてこられたアフリカ系とムラートの混血集団で，ブルーフィールズ，パールラグーンなどの都市部のほか，コーン島やサンアンドレス（コロンビア領）にも分布する．クレオール・イングリッシュを話す彼らはサンディニスタ政権以前，ブルーフィールズの行政機関や教育機関に多く従事していた．中国系住民は都市部で商店を営むほか，サンディニスタ政権以前は農園経営もおこなっていた．メスティソはカリブ海沿岸自治州では内戦終結後に人口増加し，現在では流域で多くの住民が牧場を開拓している．

14 世紀のウルワの居住域は 20,000km² と推定されるが，16 世紀のスペイン奴隷交易から逃れてリオ・グランデ上流に移住，19 世紀には西部からのヒスパニック系住民の入植とモスキート平野の森林開発，カラワラ村に設立された製材所の雇用などの影響を受けて，下流域に移住が起こった（Offen 2007）．現在の居住地は河口の二集落，および河川沿いに分布する出づくり集落である（図 1）．

カラワラ村で日常言語となっているのはミスキート語で，ウルワ語話者は少数派である．現在，ウルワ語やウルワ文化を保護する活動をしているカラワラ住民のグループ代表，レオンソ・ナイト氏（63 歳）によれば，1980 年代までカラワラ住民はウルワ語を公に話すことをためらう傾向があった．これは，聖書がミスキートで書かれており，ウルワ語が未熟な言葉として認識されるようになったからだ

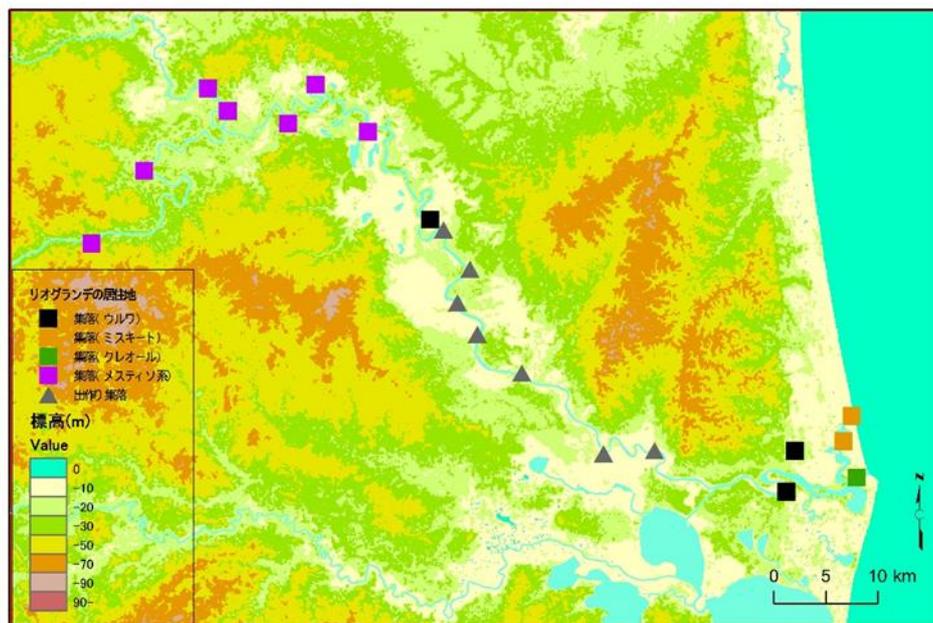


図 1 リオ・グランデ・マタガルパ下流域の集落
(現地調査による)

という。1980年代後半に米国から言語学者が訪れて研究をおこない、その固有性や希少性を明らかにし、これに啓発された住民がグループを作ったという。ミスキート系、クレオール系との混血が進んだこと、内戦後にスペイン語による学校教育が導入されたことから、ミスキート語、英語、スペイン語を話す人々が優勢になった。しかし、近隣村落との境界を裁判で主張する際にウルワ語地名がその根拠となった経緯があり、ウルワ語教育の必要性が認識され、夜間学校でボランティアによる講習会が開かれている。

(2) カラワラ村の生業と環境利用

17世紀までリオ・グランデ流域に広く分布していたウルワは、現在リオ・グランデ河口の二集落を中心に生活している。そのうちのひとつであるカラワラ村は、河口の複数集落からなる町の役所がある中心集落で、先住民の多くが信徒であるモラビア教会のほか、三つのキリスト教会、小学校と高等学校、診療所と裁判所がある。村からブルーフィールズまでは定期船が出ているが、陸路アクセスはなく、近隣の集落へはカヌー、馬、オートバイで出かけている。保健局の統計によればカラワラ村の人口は1617人、338世帯（2016年）である。全世帯のうち169世帯（50%）が農地を所有するほか、多くの世帯がこれら農産物の分配を受けている。農地は①サバンナに面した森林②河口の感潮湿地林

表1. カラワラ村における狩猟対象動物と狩猟方法（現地調査による）

	和名	学名	ミスキート語	ウルワ語	用途	狩猟方法
哺乳類	アルマジロ	<i>Dasypus novemcinctus</i>	Taira	Ukmik	◎	犬猟
	パカ	<i>Agouti paca</i>	Ibihina	Wia	◎	犬猟・銃
	クチジロベッカリー	<i>Dicotyles pecari</i>	Wari	Sawi	◎	銃
	ダマジカ	<i>Odocoileus virginianus</i>	Sula	Sana itukana siti	◎	銃
	ベアードバク	<i>Tapirus bairdii</i>	Tilba	Pamka	○	罾猟・銃
	クビワベッカリー	<i>Tayassu tajacu</i>	Buksa	Mulkus	○	銃
	マザマシカ	<i>Mazama americana</i>	Snapka	Sana bakala	○	銃
	アグーチ	<i>Dasyprocta punctata</i>	Kiaki	Malka malakao	○	犬猟・銃
	ウサギ	<i>Lepus flavigularis</i>	Tiban	Sutban	○	犬猟・銃
	リス	<i>Sciurus variegatoides</i>	Buchung	Titai	ペット	NA
	ジャガランディ	<i>Herpailurus yaguarondi</i>	Limi siksa	N.A.	害獣/毛皮	銃
	ピューマ	<i>Puma concolor</i>	Limi pauni	Nawah pau	害獣/毛皮	銃
	ジャガー	<i>Panthera onca</i>	Limi	Nawah rarauka	害獣/毛皮	銃
	コウモリ	<i>Vampyrum spectrum</i>	Kanski	Umis	害獣	
	ヤブイヌ	<i>Speothos venaticus</i>	Arari	Kulum	害獣	
	アライグマ	<i>Procyon lotor</i>	Wistitin	Suksuk	害獣	
ハナグマ	<i>Nasua narica</i>	Wistitin	Almok asra	害獣		
鳥類	ヒメシャクケイ	<i>Ortalis ruficauda</i>	Koamo	N.A.	○	銃
	コウライキジ	<i>Phasianus colchicus</i>	Kusu	N.A.	○	銃
	ホロホロチョウ	<i>Numida meleagris</i>	Suhar	N.A.	○	銃
	カモ類	<i>Anas spp.</i>	Krokum	N.A.	○	銃
爬虫類・両生類	ヌマガメ	<i>Trachemys venusta</i>	Kuswa	Kuah	◎	手・刺し網
	グリーンイグアナ	<i>Iguana iguana</i>	Kakamuk	Kahamak	◎	ゴム銃
	シロクチドロガメ	<i>Kinosternon leucostomum</i>	Siakuwa	Kurasi	◎	N.A.
	サンリドロガメ	<i>Kinosternon scorpioides</i>	Siakuwa	Mamak	◎	N.A.
	カミツキガメ	<i>Chelydra serpentina</i>	Ihi	Bala	○	N.A.
	イシガメ	<i>Rhinodemmys annulata</i>	Kuibi	Ahsa	○	N.A.
	ツナギトゲオイグアナ	<i>Ctenosaura similis</i>	Islu	Kahamak almuk	○	N.A.
アメリカワニ	<i>Crocodylus acutus</i>	Karas	yapu	害獣/皮	鉞	
メガネカイマン	<i>Caiman crocodilus</i>	Tura	sirak	害獣/皮	鉞	

N.A. : 未調査 ◎ : 頻繁に捕獲 ○ : 稀に捕獲

③河川氾濫原に立地し、①②では移動耕作、③では常畑が営まれている。カラワラ村は沿岸サバンナと常緑熱帯雨林の境界に立地し、集落周辺の土壌は砂礫が多く含まれ貧栄養である。自給的農業を営む住民の多くはリオ・グランデを手作りのカヌーで1-2日かけて遡り、土壌が肥沃な氾濫原で、出づくり小屋に泊まりながら作業をおこなう。自然堤防上に作った出づくり小屋の背後には沖積土壌があり、堤防上にはプランテン、やや標高が低い後背地にはトウモロコシやイネ、キャッサバ、タロを栽培する。乾季に水位が下がると、河岸側の沖積土壌にインゲンマメを植え付ける。トウモロコシやイネは昆虫や鳥の食害や水害にあいやすく、収穫は不安定である。一方未熟なうちに収穫するプランテンは動物の食害が少ないという利点がある。プランテンは五種類ほどの品種を栽培地の環境や食味によって合わせて栽培している。

沿岸を中心に居住するミスキートやラマ、ガリフナやクレオールに比べ、流域の森林に長く居住したスムは、かつて狩猟を日常的におこなっていた（Conzemius 1932）。代表的な狩猟具であった弓矢はカラワラでは現在みられない。主な方法は犬猟と銃である。対象とされているのはアルマジロ、パカ、ペッカリー、ダマジカ、アグーチなどの哺乳類、キジ類などの鳥類、ヌマガメなどのカメ類、グリーンイグアナである（表1）。アルマジロは犬を使って穴を探し、シャベルで掘って採捕する。アグーチとともに、集落周辺でも採捕される哺乳類である。ペッカリーは流域の湿地やラグーン周辺でヤシ林が立地する場所が猟場とされ、ダマジカはラグーン沿岸の草地やサバンナ草地が猟場となっている。ナマケモノやアリクイ、アライグマやハナグマなどは食味が好まれないので狩猟対象にはなっていない。また、アメリカワニとメガネカイマンはリオ・グランデに多く生息するが、これも狩猟対象になっていない。かつては、ピューマやジャガーが森に生息し、その革は重要な交易品となった。現在では生息数が激減し、保護の対象となっている。現在、銃を使って狩猟をする人は村でもわずかとなった。その理由を聞くと、第一に銃が高価であること、第二に猟場には蚊が多いこと、第三に猟の技術が継承されていないことが挙げられた。

漁撈も重要な生業の一つで、かつては弓矢による漁撈もおこなわれていたが、現在では釣りや投網

表2 カラワラ村における漁撈対象魚種と漁期漁法（現地調査による）

環境	対象魚種	学名	現地呼称	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
淡水 (河川・池)	シクリッド1 (肉食・在来)	<i>Parachromis</i> spp.	マスマス、サッシン	かいぼり・投網		釣り									
	シクリッド2 (雑食・在来)	<i>Amphilophus</i> spp., <i>Tomocichla</i> spp.など	トゥバ	ヤス、釣り、投網											
	シクリッド3 (雑食・外来)	<i>Oreochromis</i> spp.	ティラピア	かいぼり・投網		釣り・投網									
汽水 (河川・潟湖)	カワアナゴ	<i>Eleotris</i> spp.	ドラスカス	かいぼり・釣り											
	クロサギ類	<i>Eugerres</i> spp., <i>Eucinostomus</i> spp.	トゥリソ	投網・まき網											
	スヌーク (スズキ)	<i>Centropomus</i> spp.	カルフ	釣り・投網		刺し網・まき網									
	ハマギギ	<i>Ariopsis</i> spp., <i>Sciades</i> spp.	ラハ、トゥンキ	釣り		釣り									
	ヘプタブテルス (ナマス)	<i>Rhamdia</i> spp.	バッチ	釣り		釣り									
	ニベ類	<i>Pomadasys</i> spp.	ピスピス	釣り											
	ギンガメアジ類	<i>Caranx</i> spp.	クラウイ、ジャック	釣り											
	ターボン	<i>Megalops atlanticus</i>	ターボン	釣り		釣り									
	クルマエビ類	<i>Penaeus</i> spp.	ワーシ	投網		投網									
	海	ロブスター	<i>Panulirus argus</i>	ワーシ、ロブスター		釜・ヤス									

太線：頻繁に漁獲される 細線：漁獲される

が主要な漁法である。森林での狩猟に代わって、漁撈がより重要なたんぱく源の獲得手段となっている。魚が拡散する雨季には水揚げが激減するが、12月から6月ごろまでは湿地やラグーンで盛んに漁撈がおこなわれる。河口では投網によるエビ採捕、釣りではニベやナマズ類、スズキやヒラアジが採捕される(表2)。淡水域で主な対象となるのはシークリッド類とティラピアである。出づくり集落が形成されている流域は乾季には汽水となり、スズキ類やイセゴイが遡上する。沖合にある複数の島を拠点とした商業的なロブスター漁は、数少ない現金獲得手段である。ロブスター漁のかご作りも村に雇用を生みだしている。

村で定期的な現金収入がある世帯は市役所など行政機関や診療所、学校に勤める世帯に限られる。そのほかの世帯は、余剰農産物や魚をこれらの世帯に販売したり、木材を切り出したりして衣類や調味料の購入に充てている。

村落内の土地はすべて共有地で、慣習的には開拓した土地を親族で相続して利用する。その土地が放棄されたとみなされると、親族以外の利用が許される。相続は母系親族、父系親族双方がある。妻方居住が優勢で、村外の男性と居住する場合には妻方の親族の土地で生業を営み、村内の男性と居住する場合には双系相続となるようである。リオ・グランデの先住民居住地の土地は個人的な売買に規制があるが、筆者の調査時の2017年には西側地域からやってきた開拓者が先住民の署名入りの売買契約書を所持しているケースがしばしばみられた。こうした売買による開拓と森林伐採は急速にすすんでおり、カラワラ村住民も自ら土地測量をおこなって記録を残すなど、防衛策をとるようになっていく。

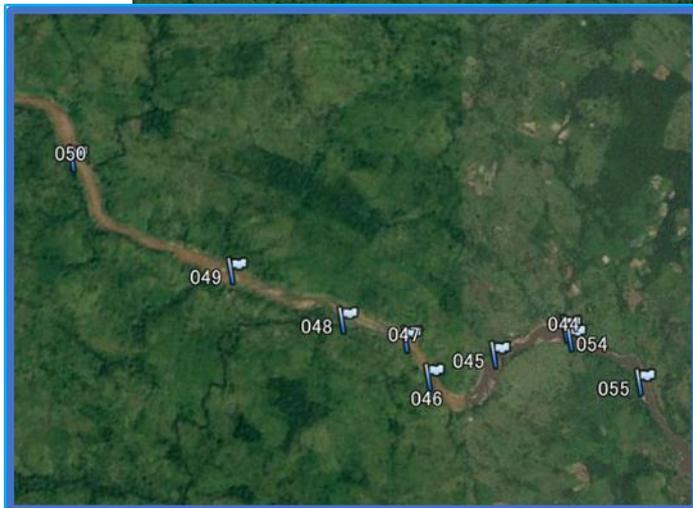
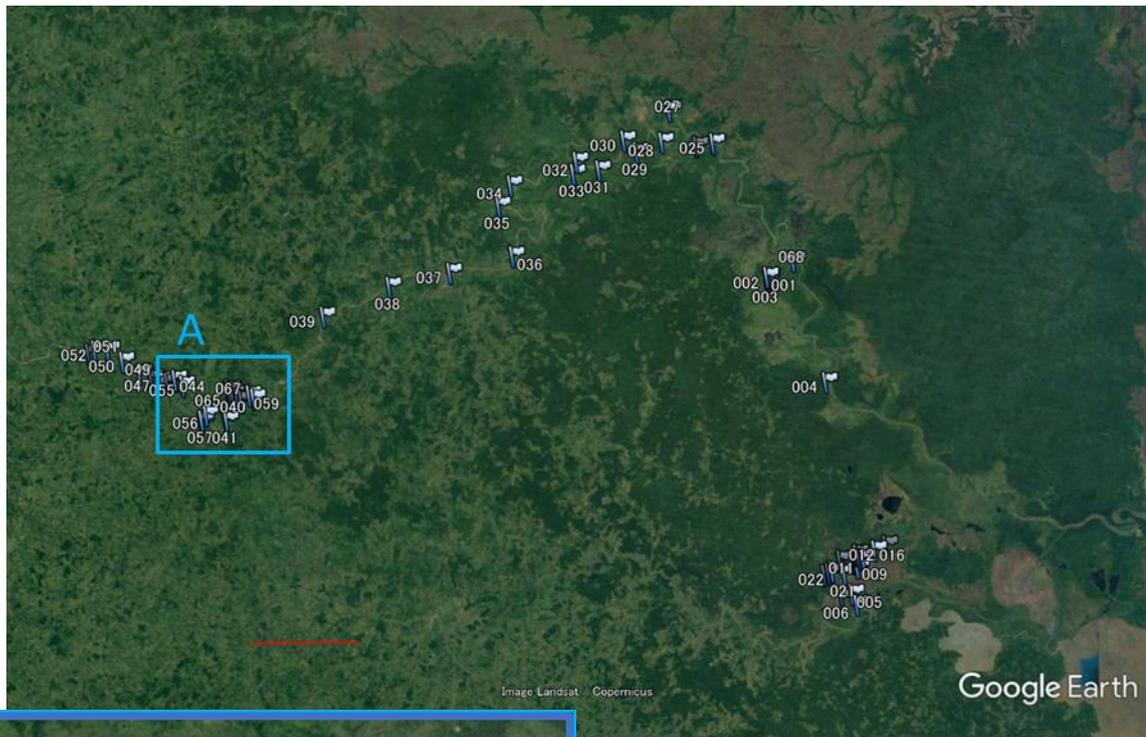
4. リオ・グランデ下流域の地名

ここでは、2018年3月9日から16日の現地調査で収集した地名とその位置、地名に関する語りについて述べる。9日から11日までの調査はリオ・グランデの支流であり、ミスキートグループとの境界になっているクリンワス川を船で遡上しながら地名の採集をおこなった。12日から16日には、リオ・グランデ本流を遡上し、インフォーマントはK氏(85歳男性) T氏(88歳男性) A氏(47歳女性)である。Kはカラワラ村生まれでウルワ語とミスキート語を話す。Tは北カリブ海沿岸州のワンキ出身で、30歳のときにカラワラ村の女性と居住を始めた。ミスキート語とイスパニア語を話す。Aはカラワラ村生まれでウルワ語とミスキート語を話す。KとTはカラワラ集落内に、Aは出作り集落で暮らしている。Aが住むブラタラは集落から手漕ぎカヌーで2日かかる出作り集落である。

Kは21歳で結婚後、ゴム樹脂採集者(チクレロ)として11年働いた。カラワラ村の八人くらいの集団で森に出かけて1-2ヶ月キャンプをしながら採集し、採集した樹脂は村で商店を営んでいた中国系の店主や、となり村で精米所を営んでいた店主に販売した。1度に持ち帰る樹脂は25-30ブロック(バケツ)、5バケツで1キンタル(約50kg)、1キンタルが200C(コルドバ)で売れた。このときズボンは7C、シャツは3C、長靴が12Cだったから、現在の2000-3000Cに相当する。当時22口径のライフル銃は70Cだった。

Tによれば、彼の出身地のワンキにはゴムの木はなく、採れるのはリオ・グランデの下流域だけだという。Tもカラワラ村の妻方に居住を始めてからすぐにチクレロとして、1970年代後半、ソモサ政権が終わる頃まで働いた。これらチクレロ経験者は村人から、獣道や地名に詳しい人々と認識されている。

図2は、GPSで記録した生業に関わりがある場所や地名がある地点、表3は、収集された地名を示している。WP1-4には、A氏とその親族の畑地分布を事例として示した。A氏の畑地はリオ・グランデの両岸にあり、プランテン、トウモロコシ、イネ、インゲンマメを主として栽培し、肉牛用のウシ



← A の拡大図

図2 地名・場所情報を収集した地点
赤線は10km。(現地調査による)

を飼育している。Aの姉はその約18km上流の両岸で畑地を耕作し、プランテン、稲、インゲンマメ、スイカを主に栽培している。その娘は隣に畑地を作って同様に栽培している。いずれも夫は他村出身で、農業や漁撈を担っている。

WP6のM氏はクリンワス川沿いに住むミスキートで、妻はウルワ系である。WP7は「川の淵」、WP8は「白い砂の土地」を意味し、ミスキート地名が主に使われている。WP11,13,15はチクレロが森に入る際に使った道の入り口である。WP19,20は刺し網や投網、釣りの好漁場として認識されている場所である。WP22のRomaは丘を指し、スペイン語が使われている。

カラワラ村住民の出づくり集落は、モラビア教会がある集落「Esperanza」は、かつてはウルワ語でSiawasと呼ばれた。ここから上流にはカラワラ村の出づくり集落はなく、WP40のTumarinがウルワ系住民が居住する最上流の村である。この間には「Company Creek」「Anglo America」「Kansas City」「Royal」といった英語地名があり、これらはアメリカ資本が木材伐採と積み出しのために開拓した場所であり、ウルワやミスキートの地名はない。Royalは、精米所があった土地としても知られている。WP29はウルワ地名「Susumu was」がよく記憶され、その意味は「ナマズの川」である。WP32のMakantakanは、アメリカの木材会社「Norlan Company」が操業していた時代に、中国系

表3 収集した地名と活動（現地調査による）

WP	活動	ミスキート地名	ウルワ地名	イスパニア地名	英語地名
1	A氏姉の娘の畑地				
2	A氏姉の義兄の畑地				
3	A氏姉の畑地				
4	A氏の畑地				
5			Kurinwas kunkun		
6	M氏の畑地				
7		Tifu	Wastuka		
8		Taska pruhni	Sau ubulka	Roma	
9			Kuah Waska Daktan		Joe Ben Lagoon
10	イバンの木				
11	チクレロの道				
12	牧場				
13	チクレロの道				
14	メスティソの家				
15	チクレロの道				
16	Forest				
17	イバンの木				
18	メスティソの家				
19	漁場				
20	漁場				
21	カワウソの足跡				
22				Roma	
23	ヤシの木				
24	チクレロの道				
25					Riverside
26			Dakti lana		
27		Suki dusa			Company creek
28					AngloAmerica
29		Batch Laya	Susumu was		
30					
31				Betana	
32		Makantakan			
33					Kansas city
34					Royal
35		Ibihina tingni	Wia was		
36				Matagalpa	
37				La cruz	
38				El gallo	
39			Siksik was		
40				Tumarin	
41	アワルタラの境界点				
42		Tumtum	Pangwakal	Elekeme	
43			Upa uka	Roma de casa roja	
44				Torno	
45		Bukusa		Sahino	
46					
47	Lの父の家				
48		Walpa bila		Boque piedra	
49					Mango
50			Dapawas		
51		Isika	Usu		
52				Can~on	
53		Sulu tara	Yuru bahka		

の労働者が居住しており、現在でも中国系の子孫が居住していることで知られている。WP35のWia wasは「アグーチの川」、WP39のSiksik wasは「カワエビの川」というウルワ地名であり、前者にはミスキート地名もついている。WP41は、先住民地区アワルタラの境界地点である。

2018年3月時点でトゥマリンに住むウルワ系住民は11世帯である。2011年にAが住む出づくり集落にトゥマリンから移住した女性によれば、同年12月に彼女の甥が土地をめぐるトラブルでメスティソに殺害され、命の危険を感じて末の息子とともに移住したという。その兄弟3人は現在もトゥマリンに住む。そのうちの一人L氏(34歳男性トゥマリン生まれ)は、ウシ35頭を放牧し、うち5頭が自分のウシ、残りは他人から預かっているウシである。農地10マンサナ(7ha)を所有し、キャッサバ、トウモロコシ、イネ、インゲンマメを自給用に栽培している。収入源は牛乳で作ったチーズである。同じくトゥマリンに住むN氏は、15マンサナ(10.5ha)の土地を農地を所有し、ウシ18頭を放牧し、うち8頭が自分のウシである。キャッサバ、タロ、トウモロコシ、インゲンマメ、イネを栽培しており、主な収入は牛乳とチーズである。L氏によれば、約10年前のトゥマリンは森林に囲まれ、ピューマがブタを食べに村に降りてきた。そのころは焼き畑をやっており、土壌もよかった。クビワペッカーリーは下流にしかみられないが、ここではクチジロペッカーリーがみられる。ほかに、アルマジロ、パカ、マダラジカが狩猟の対象となっている。猟場の範囲はWP50Dapawasまでである。内戦時にもトゥマリンにはメスティソは居住せず、2014年ごろからメスティソの入植者が増えた。Dapawasから上流にはすでに多くのメスティソが居住していたという。ここより上流では、トゥマリンの元シンディゴE氏がインフォーマントに加わり地名収集をおこなった。

WP42はミスキート、ウルワ、イスパニア語地名があり、ここにはかつて先住民居住区の境界点があったが、何者かに抜かれてしまった。WP43Upa Ukaはかつてウルワ系住民の農地であった場所である。WP44, 54, 65は、コロンブス以前の時代に刻まれた彫刻がある。この彫刻はこの地域に広く居住していたウルワによるものと考えられ、先住民性を示すシンボルとなっている。WP45はクチジロペッカーリーが登る岩場で、動物地名となっている。クビワペッカーリーは下流域のヤシ林に多く生息するのに対して、クチジロペッカーリーは森林や岩場を生息域とすることが認識されている。WP48も岩に関する語彙で、下流域に比べたこの地域の河川環境を表す地名である。WP50はウルワ地名で、河畔に繁茂するイネ科植物を指す。TumarinからDapawasはウルワの人々にとって、ニカラグア内戦時の前線地帯である。調査中、EやKからは内戦中に森林に籠もり、火を焚けずに生のトウモロコシを食べたことや、家族が戦死した場所などが語られた。

5. まとめ

本研究では、先住民マップの従来研究をふまえ、先住民が西カリブ海の多様なエスニック集団とのネットワークに位置付けられつつも、土地紛争や内戦をウルワとして経験してきたこと、そのなかで生態知識が形成されてきたことを重視して、場所の記憶と地名を収集した。とくに、その知識を先住民を代表するものとして描くのではなく、部分的で状況づけられた知識として記述するために、話者の経験や語りを含めて収集することを試みた。その結果は以下にまとめられる。

1. リオ・グランデ下流域やクリンワス川など、カラワラ村周辺だけではなく、現在は先住民居住区の外側に位置付けられた中流部でもウルワ語地名が確認された。これらの地名は内戦前後の記憶がある世代やその子孫の語りによって継承されており、今回の調査により初めて記録されたものである。ウルワの移住史を裏付ける重要な資料となりうる。
2. 先住民としての経験を語るうえで重要なのはかならずしもウルワ語地名だけではなく、ミスキート地名や英語地名も重要性をもつことが確認された。とくにメスティソ系の入植者との土地紛争

が頻発している現在、先住民としての領域を主張するうえでイギリスや米国との関係において公式化した英語地名や地図が資源としての価値を増しているといえる。ただし、イスパニア語教育の普及により、英語話者は減少しており世代を超えた記憶の継承に地名をいかに生かせるかが課題となるだろう。

3. ウルワ地名には、狩猟や漁撈活動と深いかかわりがある地名が確認された。湿地における牧場の開拓や森林伐採、河川における移入魚種の導入がすすむなかで、生態系も変化しており、これらの地名は生態史を知るうえで重要な資料となりうる。今回は河川沿いに地名を収集したが、森林や獣道では目印となる大木や猟場といった地名、知識が収集できる可能性があり、今後の課題としたい。

文献

- Anaya, S. J. and Macdonald, T. 1995. Demarcating indigenous territories in Nicaragua: The case of Awastingni. *Cultural survival quarterly* 19: 69-73.
- Boas, F. 1964. *The Central Eskimo*. Lincoln: University of Nebraska Press.
- Bryan, J. 2011. Walking the line: participatory mapping, indigenous rights, and neoliberalism. *Geoforum* 42:40-50.
- Conzemius, E. 1932. *Ethnographic Survey of the Misquito and Sumu Indians of Honduras and Nicaragua*. Washington, DC, Bureau of American Ethnology-Smithsonian Institution/US Government Printing Office (Bulletin 106).
- Chapin, M., Lamb, Z. and Threlkeld, B. 2005. Mapping indigenous lands. *Annual Review of Anthropology* 34:619-638.
- Crampton, J. W. 2009. Cartography: performative, participatory, political. *Progress in Human Geography* 33: 840-848.
- Cronkleton, P., Albornoz, M. A., Barnes, G., Evans, K. and de Jong, W. 2010. Social geomatics: participatory forest mapping to mediate resource conflict in the Bolivian Amazon. *Human Ecology* 38: 65-76.
- Dana, P. H. 1998. Nicaragua's GPSistas: Mapping their lands on the Caribbean coast. *GPS World* 9: 32-43.
- Dunn, C. E., Atkins, P.J., and Townsend, J.G. 1997. GIS for development: a contradiction in terms? *Area* 29:151-159.
- Dunn, C. E. 2007. Participatory GIS - a people's GIS? *Progress in Human Geography* 31: 616-637.
- Freeman, M. 2011. Looking back-and looking ahead-35 years after the Inuit land use and occupancy project. *The Canadian Geographer/Le Géographe canadien* 55: 20-31.
- Gordon, E. T. and Hale, C.R. 2003. Rights, Resources, and the Social Memory of Struggle: Reflections and Black Community Land Rights on Nicaragua's Atlantic Coast. *Human Organization* 62: 369-381.
- Green, T. 1999. *A Lexicographic Study of Ulwa*. PhD dissertation, Massachusetts Institute of Technology pp. 297.
- Herlihy, P. H. and Knapp, G. 2003. Maps of, by, and for the peoples of Latin America. *Human Organization* 62: 303-314.
- Herlihy, P. H. 2003. Participatory research mapping of indigenous lands in Darien, Panama. *Human Organization* 62: 315-331.
- Hirt, I. 2012. Mapping Dreams/Dreaming Maps: Bridging Indigenous and Western Geographical Knowledge. *Cartographica* 47:105-120.

- Helms, M. W. 1969. The cultural ecology of a colonial tribe. *Ethnology*: 76-84.
- Kroeber, A. L. 1939. *Cultural and natural areas of native North America*. Berkeley: University of California Press.
- Nietschmann, B. 1995. Defending the Miskito Reefs with maps and GPS. *Cultural Survival Quarterly* 18:34-37.
- Nietschmann, B. 1997. Protecting Indigenous Coral Reefs and Sea Territories. In *Conservation Through Cultural Survival: Indigenous Peoples and Protected Areas*, ed. S. Stevens, 193-224. Washington, D.C.: Island Press.
- Offen, K. H. 2003. Narrating place and identity, or mapping Miskitu land claims in northeastern Nicaragua. *Human Organization*, 62, 382-392.
- Offen, K. 2007. Creating Mosquita: mapping Amerindian spatial practices in eastern Central America, 1629-1779. *Journal of Historical Geography* 33:254-282.
- Rundstrom, R. A. 1993. The role of ethics, mapping, and the meaning of place in relations between Indians and Whites in the United States. *Cartographica*, 30, 21-28.
- Rundstrom, R. A. 1995. GIS, indigenous peoples, and epistemological diversity. *Cartography and geographic information systems* 22: 45-57.
- Sletto, B. I. 2009. We drew what we imagined. *Current Anthropology* 50: 443-476.
- Sletto, B. I. 2014. Cartographies of remembrance and becoming in the Sierra de Perija, Venezuela. *Transactions of the Institute of British Geographers* 39: 360-372.
- Sletto, B. 2015. Inclusions, erasures and emergences in an indigenous landscape: Participatory cartographies and the makings of affective place in the Sierra de Perija, Venezuela. *Environment and Planning D-Society & Space* 33: 925-944.
- Steward, J. H. 1955. *Theory of culture change*. Chicago: University of Illinois Press Urbana.
- Stocks, A. 2005. Too much for too few: problems of indigenous land rights in Latin America. *Annual Review of Anthropology* 34: 85-104.
- Toledo Maya Cultural Council and The Toledo Alcaldes Association 1997. *Maya atlas: the struggle to preserve Maya land in southern Belize*. Berkeley: North Atlantic Books.
- Van Cott, D. L. 2000. *The friendly liquidation of the past: the politics of diversity in Latin America*, University of Pittsburgh Press.
- Wainwright, J. and Bryan, J. 2009. Cartography, territory, property: postcolonial reflections on indigenous counter-mapping in Nicaragua and Belize. *cultural geographies* 16(2): 153-178.
- Wood, D. 2010. *Rethinking the power of maps*. New York, Guilford Press.